キャラクター名
鶴喰　怜（つるばみ　れい）

プレイヤー名

シンドローム	ウロボロス ノイマン	ワークス	UGNチルドレンC	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	17	性別	男
覚醒	生誕	衝動	飢餓	初期侵食率	35 %
出自	天涯孤独	経験	仲間の死	邂逅	友人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	1	0	0			1
精神	5	1	3			9
社会	1	0	0			1

HP	31
行動値	11
(非装備時)	11
戦闘移動	16
全力移動	32

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	4		交渉		
回避	1		知覚			意志	3		調達	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
魂の宿業”アルマ・カルマ”		0		(3+) *3+2D		判定ﾀﾞｲｽ+（3+）*2/暴走まとめ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
怨念の呪石	
思い出のミサンガ	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
輪廻の獣	P	N		
死んでいった仲間達	P　執着	N　憐憫		
霧谷雄吾	P　尊敬	N　隔意		
霈然驟（はいぜん・しゅう）	P　友情	N　嫌気		
門人	P　執着	N　不安		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:　6	残り財産P：　4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
極限暴走	★	-	常時	-	自身	-	-	
効果：HPﾀﾞﾒｰｼﾞ与時をﾄﾘｶﾞｰとするｴﾌｪｸﾄを暴走時にも適応する								
怨念の呪石	2	3	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ		自身		-	
効果：攻撃力+２D・暴走付与　一回/シーン								
背徳の理	3	3	ｵｰﾄ	至近	自身	自動	-	
効果：HPﾀﾞﾒｰｼﾞ与時、シーン間ｴﾌｪｸﾄ判定ダイス+Lv*２								
喰われし贄	3	1	ｵｰﾄ	至近	自身	自動		
効果：HPﾀﾞﾒｰｼﾞ与時、シーン間攻撃力+Lv*３								
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ：ｳﾛﾎﾞﾛｽ	2	2	ﾒｼﾞｬｰ				-	
効果：C値-[LV](下限7)								
赤：無機なる四肢	1	1+1	ﾒｼﾞｬｰ	視界	-	対決	-	
効果：攻撃【4+Lv】　ドッチ-1								
生き字引	1	1	ﾒｼﾞｬｰ	視界	自身	-	-	
効果：情報代用意思判定　判定ダイス+Lv								
勝利の女神	4	4	ｵｰﾄ	視界	自身	自動	100	
効果：判定直後達成値+【Lv*3】								
ｲｰｼﾞｰﾌｪｲｶｰ：ﾌﾞﾗｯﾄﾞﾘｰﾃﾞｨﾝｸﾞ	★							
効果：血や体液から情報を読み取る								
究極鑑定	★							
効果：アイテム分析								
効果：								
効果：								
効果：								

俺は、無知で無力だった。
情報を集めるしか能はなく、諜報活動が主な任務だった。
どんなに頑張っても沢山の仲間がしんだ。しんだ。俺に力があればと何度も嘆いた。
――そんな俺にある日、「力が欲しいなら、喰らえばいい」と、鴉が囁ったんだ。
俺を庇った仲間が死んだ。そいつを取り込んで血から情報を得られるようになった。
俺の前で暴走した仲間が死んだ。そいつを取り込んで俺は力を揮えるようになった
取り込めば取り込むほど強くなっていく。誰かの犠牲の上にたつ、この借り物の力がいつの間にか俺の主力となっていた。
「”大鴉”と組むだって？あいつと組んだら最後、帰ってくるときは腹の中だぜ」
そんな言葉を聞いた。成程、ナンセンスだが間違いない。
誰かの死肉を喰い漁り、他人の力で飾り立ててふてぶてしく生きていく。成程、狡猾な鴉そのものじゃないか！
俺はもう十分に強いのだからもう誰かを食らうこともない。喰らうこともないなら、誰かと共にいることもない。
危険な任務を進んで受ける。一人であれば、もう誰かが死ぬところを見ることもない。
日常なんてしらない。俺の日常はいつだって、誰かが死んでる赤い世界だった。
そう思っていたのに。いつの間にか俺の周りにも人がいた。――鬱陶しくて、騒がしい日常とやらがそこに存在していたんだ。

天邪鬼で皮肉屋なひねくれた青年。だが元々の性格は真面目なので文句を言いながらも学校にはいくし他人には付き合うし嫌々ながらも手を貸してしまう、そんなタイプ。多分チョロい
日常を過ごしているときはマスクをつけている。本人は理由などないというが自身の衝動に対する無意識な恐れから。
幼少時”生き字引”程度しか上手く扱えず、主に諜報分野で活躍していたが数度目の任務で自分以外の人間が死亡、輪廻の獣に取りつかれる。
そこからの成果は目覚ましかったが、同時に同行者が死亡した際、そのエフェクトを取り込んで帰還する姿に嫌悪感を示すものもいた。
本人も他人と協力することを厭い、基本的に単独行動を好んでいた。NPCやPC2と会うまでは
最初こそNPC達に塩100パーセント（のつもり）で対応していたが何度も組まされ、ともに生還してくれる彼らを彼なりに信頼するようになる。